

尿膜管膿瘍が受診の契機となった 放置糖尿病の1例

かき ぼ とし あき¹⁾ また が けん た ろ う あお き あき ひこ
垣 羽 寿 昭¹⁾ 又 賀 建 太 郎²⁾ 青 木 明 彦³⁾
なが さわ あつ し¹⁾ やま もと く み¹⁾ さ とう とし あき¹⁾
永 澤 篤 司¹⁾ 山 本 公 美¹⁾ 佐 藤 利 昭¹⁾

キーワード：尿膜管膿瘍，2型糖尿病

要 旨

症例は73歳の女性。X-18年頃に糖尿病の診断で近医加療歴あるも通院を自己中断。X年4月末から腹痛を自覚。5月中旬から症状増強するため、救急外来を受診。腹部単純CT検査において、右下腹部に腹壁に浸潤するような不整な腫瘍像を認め、膀胱頂部へと連続しており、尿膜管癌が疑われた。精査目的で泌尿器科入院となったが、入院時検査でコントロール不良の糖尿病（随時血糖 398 mg/dL, HbA1c 9.6%）を指摘され糖尿病内科へ紹介となった。強化インスリン療法を導入し血糖管理を行った。腹部腫瘍に対する試験穿刺の際に排膿を認め、尿膜管膿瘍と診断された。抗生剤の投与とドレナージにより膿瘍は縮小、糖尿病はシタグリプチンとグラルギンの併用により血糖コントロール良好となった。尿膜管膿瘍を合併した糖尿病の症例は稀少であり、若干の文献的考察を加えて報告する。

はじめに

尿膜管膿瘍は胎生期の遺残物である尿膜管に感染を生じ、臍部の発赤、排膿、腹痛などを主訴に受診する場合が多いが、成人での尿膜管疾患は比較的まれとされている。

今回筆者らは、尿膜管膿瘍が受診の契機となった放置糖尿病の高齢患者を経験したので、若干の

文献的考察を加えて報告する。

症 例

症例：73歳，女性。

主訴：腹痛。

現病歴：X-18年頃に糖尿病の診断で近医加療歴あるも通院を自己中断した。X年4月末頃から腹痛を自覚，5月11日から症状増強するため，12日に救急外来を受診した。右下腹部に腫瘍を触知し，CT検査において尿膜管癌の腹壁浸潤が疑われ，13日泌尿器科を受診し，以降外来で精査中であつ

Toshiaki KAKIBA et al.

1) 松江赤十字病院糖尿病・内分泌内科

2) 益田赤十字病院第三内科 3) 同 泌尿器科

連絡先：〒690-8506 松江市母衣町200